

# 人のために働く

交通局総務部総務課

松本恵里子

状態にあるかもしれない。

しかし、「酔う」ためには、相手が満足してくれていることが前提である。決して独り善がりの満足ではない。また、「酔い」にも効用がある。どんなに辛い仕事でも、感覚が麻痺しているために気分よくこなすことができることだ。以来、やみつきになったわけである。

さて、私は交通局で広報の仕事をするようになった。この業務を通してどのように人の役に立っていきけるだろうか。

私が地方公務員を目指したのは、人の役に立ちたかったからである。市レベルの自治体しか受験しなかったのも、住民と直に接する機会がなければそれを実感できないだろうと思っただけだ。

大学時代には、多くの学校行事の運営に携わってきた。作業それ自体は大して楽しいものではなく、むしろ辛いこと、汚いことの方が多かったが、人の役に立っていると思えばとても清々しくなれるということを知った。

意地悪な人は、それを偽善であるとか、自己満足だと言う。確かに、人のために働いているとき、ちょっとした「酔い」の

ださる方の励みにもなるような内容でお伝えしていきたい。

また、広報とは「広く報せる」、即ち一方的に発信するというニュアンスがあるが、実際は多くの情報を「受ける」立場でもある。我々の朝は、担当者全員で約十紙の新聞を読むことから始まる。交通局あるいは交通事業全体に関連する記事をスクラップするのだ。本市や他都市、あるいは同業他社からも情報が寄せられる。

その情報を我々が厳選し、厳選したものを局内に回覧するのには、膨大な情報に局全体が流されないようにするという意義があるのだろう。間接的ではあるが、対内的な広報だと言える。

この作業にはどうしても主観が入る。しかし、膨大な情報に流されまいとして、「防波堤」となってしまう、情報を寄せ付けなくなることは避けたい。いい意味での取捨選択をして、必要だと思われる情報は増幅して局内に伝えていきたい。

このように、情報を提供するというサービスを通して、お客様と職員のどちらにも影響を与え得る。多くの人の役に立って、酔いたいものである。

所詮「酔い」というものは、必ず醒めるときが来る。醒めれば醒めるたびに原動力としての「人の役に立つこと」をして新たに酔い、頑張り続けていきたい。

## あとがき

今回の特集は、循環型社会の構築に向けて、基本的な考え方の枠組みと行政、市民、事業者の各分野の取り組みを紹介した。

循環型社会形成に向けた国の法制度が改正され方向性が示されたことにより、本格的な動きが始まったのかと思えば、大量廃棄の文化風土は、行政も含めた事業所の活動や市民生活の隅々まで浸透し、また、社会経済システムに深く食い込み、簡単に転換できないものではないことがわかってきた。

横浜市環境事業局の「市民の消費及びリサイクル活動に関するアンケート調査」(平成十三年一月実施)によれば、日常生活で心がけているごみを少なくする工夫は、「レジ袋や紙袋をもらわず買い物袋をいつも持つていく」は一七%、「いつもリターナルびん入り商品の購入をしている」はアルコール商品で八%、飲料食品で六%、調味料(醤油等)は一二%という割合であった。身近なりサイクル活動を行っている市民が、循環型を目指す社会全体のシステムとのつながりを実感でき、

大量廃棄社会の前に徒労感を感じずに活動を行うにはどうしたらよいのだろうか。

人々の日常の暮らし方と社会経済システムや技術との複雑な関係をわかりやすく目に見える形で示し、「循環型行動」のモチベーションを誘発する仕掛けをつくり、事業者や市民と協力して実施する、という「コーディネート型」「パートナーシップ型」の自治体行政の役割がさらに一層重要となる、と植田、細田両先生が指摘されている。循環型社会の形成における新たな役割をどう担えるかが、今世紀の自治体行政の試金石となるのではないかと感じた。△中川▽

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「自主研究レポート」への投稿をお待ちしています。

応募される方は、事前に研究の概要をA4紙三枚以内にとり、企画局政策部調査課までお送りください。FAX 六六三・四六二三 お問い合わせは、電話 六七一・二〇二九

●第143号(二〇〇〇年九月)  
特集・横浜とワールドカップサッカー

- 1 ワールドカップサッカー大会の横浜開催に向けて  
—— 金近忠彦
- 2 座談会・コンベンション都市戦略としてのワールドカップサッカー  
—— ニッ谷洋子・嶋田昌子・太田 昇・西田善夫・魚谷憲治
- 3 2002ワールドカップ市民の会の活動とねらい  
—— 宝田良一
- コラム・国際メディアセンター  
4 七万人の歓声が響く  
—— 横浜国際総合競技場の運営戦略 —— 木村重治
- 5 日韓共催の意義とスポーツの歴史と現状から  
—— 大島裕史
- 6 横浜とスポーツ文化の振興  
①市民と生涯スポーツ —— 鈴木英夫  
②ワールドカップサッカーの開催とスポーツ文化の振興 —— 岩倉憲男
- ③サッカー振興における横浜サッカー協会の歴史と役割 —— 藤木隆明
- ④次世代のスポーツ環境とイギリスとの比較を通して  
—— 神林飛雄史  
コラム・横浜育ちのJリーガー  
—— 永山邦夫・有馬賢二・中村俊輔・大橋正博
- 7 横浜のサッカー文化  
①横浜にサッカー文化の種を播く——横浜F・マリノスのホームタウン活動 —— 松本喜美男
- ②横浜FCの誕生と新しいチーム運営 —— インタビュー・辻野臣保
- ③横浜と少年サッカー —— 堀内正明
- ④総合スポーツクラブを目指すNPO「かながわクラブ」 —— 内田佳彦
- ⑤フットボールクラブ本郷(FC本郷)と栄区サッカー協会 —— 吉川 勝
- ⑥座談会・指導者の求めるサッカー環境  
—— 内田 渉・野地芳生・伊藤陽介・石井和則
- 新鮮力/サッカーの街横浜 —— 吉田 剛

●第144号(二〇〇〇年十二月)  
特集・成熟する横浜の郊外

- 1 「郊外」というライフスタイルとまちづくり  
①郊外型ライフスタイルの形成と展望 —— 三浦展
- ②郊外住宅地開発の変遷と展望 —— 小池信子
- 2 横浜における郊外の成長と成熟  
—— 人口動態と市民生活の視点から —— 編集部
- 3 横浜の郊外市街地形成と交通  
①鉄道整備と郊外部の街づくり —— 古木淳・田原秀樹
- ②東急多摩田園都市における郊外再構築進化論 —— 島津良樹・田苗創基
- コラム・横浜郊外文化とトリエンナーレ —— 高安宏昌
- 4 横浜の「郊外」は今——フィールドからの提言レポート  
①青葉区 —— 寺岡充・宮坂彰志・卯都木隆幸・小田成一郎・階堂智子
- ②都筑区——港北ニュータウンを中心として —— 松岡文和・米満東一郎・續橋宏昭
- ③港南区 —— 城内孝元
- ④栄区 —— 山口彰夫・三枝木伸・田村慶子・橋本健
- 5 郊外の都市づくりのこれからを考える  
①成熟化する郊外の都市づくりを考えるための見取り図 —— 谷口和豊・杉野展子
- ②これからの郊外の交通を考える —— 加川浩・柿崎祐
- ③集合住宅団地の再生と戸建て住宅地の環境保全  
—— 菅孝能・新明健・見学洋介・新江英雄・大場重雄
- ④「農」や「緑」と共生するまちづくり —— 江成卓史・内海宏
- ⑤成熟した郊外を支えるコミュニティビジネス —— 吉田洋子・古居みつ子
- 調査&政策研究/ヨコハマをお貸しいたします——横浜フィルムコミッション事業 —— 増田文彦
- 新鮮力/新・地球世紀へのキーワード「共に生きる」 —— 角田定孝

●第145号(二〇〇一年三月)  
特集・都市生活と動物

- 1 人と動物の関係を考える —— 林 良博
- 2 肉食文化と生命尊重——日本における肉食の歴史と人権の視点から —— 吉田拓郎
- 3 横浜の動物園  
①ズーラシアのめざしたもの —— 堀 浩
- ②ズーラシアの役割・活動 —— 紺野康文・河合正嗣・大坂 豊・市川典良
- ③横浜動物の森公園よこはま動物園の建設事業について —— 吉田哲夫・松寄尚紀
- ④これからの動物園を思う —— 石原敏明
- 4 都市生活とペット  
①横浜市の動物関係行政 —— 渡辺洋一
- ②地域猫の誕生——磯子区猫の飼育ガイドライン推進協議会の活動 —— 小柳充子
- ③西区の動物介在活動支援事業 —— 露崎隆司・笹野哲雄
- ④白朋苑の動物介在活動(ワンワンクラブ) —— 阿部富美子・荒牧健夫・加藤一則
- ⑤「あなた」と「猫」と「世の中」と —— 太田成江
- ⑥集合住宅とペット飼育 —— 井本史夫
- ⑦学校飼育動物 —— 鳥居正夫
- 新鮮力/動物園に来て、感じてほしいこと —— 小野香織

# 調査季報

# 146

2001年6月

編集・発行  
横浜市企画局政策部調査課

〒231-0017横浜市中区港町1-1

TEL.045-671-2029

2001年6月30日発行

横浜市広報印刷物登録  
第1301285号

類別・分類A-BA011

デザイン サウスピア

印刷 株式会社ガリバー

ISSN0387-8899

この印刷物は再生紙（古紙混入率70%）を使用しています